

山口に桃源郷を求めて

山口県立大学国際文化学部 4 年

(とくご大好きサポーターズ 2004 年度代表)

岡村 優子

目次

．はじめに

A. 風景について

B. ニュージーランドで見た桃源郷

．本論

A. 徳地との出会い

B. 初めての会議

C. 徳地町

D. 活動記録

1. 第 1 回 『めざせ！徳地づくり達人 塾』

2. 第 1 回フィールドワーク

a. 趣旨・参加者・日時

b. 1 日目 出雲・八坂地区

c. 2 日目 油野地区

d. 3 日目 島地・串地区

3. 第 2 回 『めざせ！徳地づくり達人 塾』

4. 第 3 回 『めざせ！徳地づくり達人 塾』

5. 第 4 回 『めざせ！徳地づくり達人 塾』

6. 第 2 回フィールドワーク

a. 趣旨・参加者・日時

b. 新規就農者 浅村久志・栄子さん

c. 自由創作いとう

d. 伊賀地の郷 味工房

e. ねむの木

7. 第 5 回 『めざせ！徳地づくり達人 塾』

8. 第 6 回 『めざせ！徳地づくり達人 塾』

．討論

- A. 記憶の中の風景
- B. 人々が描いた理想郷
 - 1. 『桃花源記』
 - 2. 『桃花源記』の解釈をめぐって
 - 3. 「小国寡民」
 - 4. ユートピア
- C. サポートアーツの活動から学んだこと
 - 1. 柚野の建設現場にて
 - 2. キーワードは「交流」
 - 3. 自然とは
- D. 『達人 塾』の今後
- E. 桃源郷への出発

謝辞

引用文献・Web ページ

資料

はじめに

A. 風景について

私は風景が好きだ。特に、自然風景、田んぼや山に囲まれた田舎の風景、どこことなく寂れた感じのする町の風景がとても好きだ。そういった風景をじっくり見ていると、何ともいえない気持ちになる。自分が生きていくことに有り難味を感じ、全てのものが、とてもいとおしく思えてくる。これは風景に限らず、風景の一部であることもある。例えば、川とそこに架かった橋の組み合わせであったり、たった一本の木であったり、木でできた小屋であったり、使い込まれた道具であったり。こういったものをあちこちで見ているうちに、自分にとって最も魅力的といえる風景はどんな風景だろう、将来どのような風景の中で生活するのが理想的だろう、ということを考えるようになった。それは今思い起こせば、私が理想郷像を追い求め始めた第一歩であったと思う。

B. ニュージーランドで見た桃源郷

2003年、日本語教師アシスタントとしてニュージーランドへ行った。ニュージーランドは「世界一きれいな国」とも言われており、ファンも多いようだが、私もその魅力にとり憑かれた人物の一人だ。というのも、町から一歩出ると、そこには緑の丘と羊（または牛）、そして青い空が、まるで絵本の世界のように広がっているのだ。田舎の風景が好きな私は、農業国と言われるその国の風景に魅了されたのだった。初めて見るその風景だが、どうしてだろう、少し懐かしさを感じた。

「将来このようなところに住むのもいいかなあ。」

と、郊外に出る度に思い、そこに一つの桃源郷を見た気がした。その光景は私にとっての一つの理想郷となった。しかし、なぜ初めて訪れた土地を懐かしいと感じたのだろうか。

このようなことは以前にも何度かあった。行ったことのない土地に懐かしさを感じるのだ。デジャビュといって誰でも経験したことがあるのではないだろうか。

ホームステイ中、ホストファミリーや知り合いになった人たちによく聞かれたのが、

「ユウコの住んでいるところはどんなところ？」

という質問だった。

「東京や大阪のような大きな都市ではなく、のんびりした小さい町だよ。」

と答えていた。けれどもこの時、自分が今まで育ってきた山口県は「住みやすく良い所」だとは思いますがそれはなぜなのだろう、山口で生活していくことは果たして私に最も合っているとと言えるのだろうか、という疑問が浮かび上がってきた。そして、何でも選択出来る自由な立場に置かれた自分は、将来どんな所を選び生活していきたいのか、この時初めて真剣に考えたのだった。

こうしてニュージーランド滞在をきっかけに、自分がこれまで育ってき、現在も住んでいる山口という地域について、客観的に見つめる機会を持つことが出来た。私にとって、日本で暮らすとは、また山口で暮らすとはどういうことなのか、そして、それまでは、たまたまそこに生まれそこで生活してきただけだった山口と、これからどう関わっていくべきなのかを考えるようになった。また同時に、私にとっての理想郷のイメージを意識的に追求し始めたのだった。

． 本論

A. 徳地との出会い

ニュージーランドからの帰国後は大学に復学し、大学生活最後の一年、もしかすると最後の一年になるかもしれない山口での生活が、2004年4月に始まった。

私は、生まれてからずっと育ってきた自分の故郷を知るため、また、山口を「住みやすくいい所」と思う背景や理由を探るため、何をすればよいかを考えていた。すると、ゼミで私の話を聞いた安溪遊地先生が、こういうのがあるよ、と徳地町の地域づくりの話を持って来られた。この話は、県央部合併や過疎の進行といった課題に対応していくために、二年前から徳地町で進められてきた『徳地町 中核都市建設プラン基本計画』に基づいた、住民の意見を取り入れた、住民の手により進められる地域活性化の話であった。地域と大学の結びつきが重要視されるようになってきた昨今、県立大学の学生にもこの活動に参加して欲しいとの申し出があったのである。安溪先生が大学側の責任者だった。徳地町にはもともと祖母の家があり、幼い頃から度々訪れ馴染みがあったことも誘われた理由の一つであった。

理想郷というものは、人々が夢と希望を抱きながら作っていくことで現実のものへと変わっていくのではないかと思う。だから、住民が自分達の町を自分達でつくっていく、その活動の中で、私の疑問に対するヒントが得られるのではないだろうか、そう考え、ここから私と徳地の町づくりとの関わりが始まった。参加される住民の方が、どのような想いを持たれており、どのような町づくりを目指しておられるのか、この活動を通して知ることが出来ればと考え、私は初の町づくり活動への参加に胸を膨らませたのだった。

B. 初めての会議

メンバー

県立大学の参加者メンバーが決まると、平成16年6月19日、徳地町山村開発センターで顔合わせ兼今後の方針決めの会議が行われた。参加者は安溪遊地先生、安溪貴子先生、県立大学生・大学院生、学生以外でも徳地に興味のある方、徳地町役場企画財政課の方、そしてコンサルタントの金子和男さんであった。徳地町が住民主体の町づくりを進めるのは今回が初めてであったため、これまで各地で町づくり・町の活性化をされてきた、この道のプロである金子さんが呼ばれていたのだった。

ワークショップとは

まずは金子さんから、この活動がワークショップ形式で進められていくという説明があった。ワークショップとは、あるテーマについて、皆でワイワイ盛り上がりながら意見を自由に発言していき、最後には意見をまとめていく活動のことで、近頃盛んに開かれるようになってきたという。ワークショップは参加型会議とも言われ、何回かに分けて開かれることも多い。

今回のワークショップ

今回のワークショップは、平成16年度を通して全部で9回開かれることとなった。このワークショップを企画・運営していくのがこの時集まったメンバーである。忙しい中集まって来られる徳地住民の方々が、限られた時間の中でより効率的に動け、より充実したワークショップになるよう、私たちが準備し司会進行を務め、また会議を重ね反省点の改善などを行い次のワークショップに備え準備するのだ。

ワークショップの名前、スタッフの名前

話し合いの結果、ワークショップ名を『めざせ！徳地づくり達人 塾』、町役場の方、金子さんを除いた私たちスタッフの名を『とくぢ大好きサポーターズ』とすることになった。前者は、誰もが何かの達人であり、それを活かして徳地をつくっていく達人になれるのだ、という思いを込めて、後者は主役である徳地住民の方々をいろいろな面でサポートして行けたらという願いを込めて付けられた。ワークショップ名に「めざせ！」が付いているの

は、「自分はまだ達人なんかじゃないのに」という気持ちに配慮した結果であり、「 」が付いているのは、これがないと「めざせ！」が塾をめざすようにように見えてしまうからだ。

こうして『めざせ！徳地づくり達人 塾』におけるサポーターとしての第一歩が始まったのだった。

C. 徳地町

徳地町は、山口市・防府市・周南市に隣接しており、その北端は島根県とも接している。昭和30年4月に、出雲・八坂・島地・柚野・串の五地区が合併して出来た町で、今でもこの区分は色濃く残っている。町の中心を南北に佐波川が流れており、その佐波川は防府市を通り瀬戸内海へ繋がっている。(資料1参照)

D. 活動記録

1. 第1回『めざせ！徳地づくり達人 塾』

参加者

2004年7月17日、第1回『めざせ！徳地づくり達人 塾』が、徳地町の八坂公民館で開かれた。初めての試みに、一体何人の方が来られるのか、どんな方が来られるのか、受け付けをしながらドキドキしていた。後から聞いた話では、当日参加された方は37名、参加されなかった方を含め本ワークショップへの登録者は60人だった。また、佐波高生の参加が6人で、若者が割と多く見られたことが今回の特徴だった。旗揚げアンケート(後で詳しく述べる)の結果より、この日の参加者の年代は10～20代8名、30代4名、40代2名、50代11名、60代9名、70代以上3名であった。徳地町は今までこういった「まちづくり」やワークショップを行ったことがなく、閉鎖的な部分があるとの噂を聞いていたので、参加者が集まらなかったら、と心配していたが、そのような心配は無用であった。呼び掛けをして下さった町役場の方のおかげとも言えよう。実際に参加される方々はそれぞれ何らかの想いを抱いて参加されているようで、強い熱意が感じられた。それぞれの参加者は、一体どんな想いで『達人 塾』へ参加され、どんな町を理想としながらどう実現に向けて行動されるのだろうか、今後の活動の中でそれが少しでも見出せたら、と思った。

『達人 塾』開始

徳地町長からの「住民主体型の町づくりを期待しています。」というあいさつで、いよいよ『達人 塾』が始まった。我々『サポーターズ』が自己紹介をした後、金子さんから本ワークショップの成り立ち等の説明があった。

旗揚げアンケート

そして、本音でワイワイと誰もが発言できるような場作りをするためには、まず相手のことを知り、緊張を解くことが大切だろう、ということから、ゲーム感覚で出来る旗揚げアンケートを行った。何色かの色カード（ここでは五色）をそれぞれに配り、こちらからの選択式の質問（ここでは五択）に対応した色カードを挙げて答えてもらう、というもので、ワークショップではよく行われることだそうだ。色別なので各色のカウント担当者を決めておけば一目で集計することが出来、一斉に答えてもらうことが出来るという利点がある。例えば「どこにお住まいですか？」という質問に対して、出雲は赤、八坂は青、島地は黄色、柚木はピンク、串は緑、という風である。（資料2参照）

グループ分け

30人以上の参加者が全員でまとまって話し合っていくことは難しい。決まった人物のみが発言をして終わる、ということになり兼ねない。そこでワークショップに備えて事前にグループ分けをしておく必要があったのだが、以下の基準で町役場の方がして下さった。

ある程度知っている人について、よく発言する人・リーダー格の人がまとまらないよう配分する。役場の職員がかたまらないようにする。同じ地区の人がかたまらないようにする。最後に男女・年齢があまりにも偏っているところは微調整をする。

この結果、1グループ5～6人、全部で10グループ作られた。

他己紹介

旗揚げアンケートの次は、それぞれのグループでメンバー同士の紹介を行った。二人一組で、予め配っておいた他己紹介シート（資料3参照）をもとに相手に質問をし、答えてもらう。そして相手のことをシートに記入し埋めていくのだ。このシートが完成すると、今度はグループの他のメンバーに先ほどの相手のことを紹介するのである。

グループワーク

こうして随分会場の雰囲気是和やかになったところで、第一回の本題、これまでの地域づくりの振り返りに移った。5～6人に満たないグループも幾つかあったので、2グループ一班になり話し合ったところもあった。結果、少ないところで5人、多いところで8人のグループが、全部で7グループできた。

「徳地の宝・まちの自慢」と、「基本計画で取り組みたいこと」の二つのテーマで、それぞれ一枚ずつ模造紙を用意し、一人一人が意見を書いたカードを自由に貼っていく。各グループに一人はサポーターが入るようにし、同じような意見をまとめたり、カテゴリーで括ったりするなど、グループワークが円滑に進むよう務めた。それぞれ30分ずつ、合計1時間で話し合いをし、その内容を発表したところで第一回『達人 塾』は終了した。

グループワークの結果

まず「徳地の宝・まちの自慢」について、以下のような意見が出された。

作物・特産品（米、わさび、しいたけ、こんにゃく、徳地みそ、とうふ、まつたけ、ツクネイモ、ヤマノイモ、野菜、よい材木、和紙）

自然（佐波川の源流、森林や緑が豊か、滑国有林、澄んだ空気、きれいな水、星がよく見える、蛍、大原湖とキャンプ場、昆虫など生き物が多い、登るのに丁度よい山やウォーキングコースによい場所が多い）

歴史・史跡（重源上人の史跡、重源の郷、和紙、雨田公園、奇兵隊の元本部、石風呂、文殊岳、袈裟岩、法光寺仏像、徳地人形浄瑠璃、僧取淵、月輪寺）

人・生活（広い、人情が厚い、花火大会、手先が器用な人が多い、三谷棚田、お年寄りが元気、川で遊べる、親切な人が多い、平和、静か、農村景観）

次の「基本計画で取り組みたいこと」については、特産品生産・販売、若者が住めるような町づくり、農業体験、廃校・空き家・休耕田の利用、高齢者が生き生きできる町、様々なイベントで活気を出す、マップ作り、勉強・教育の場、自然を活かした自然公園やハイキングコースを作る、交通機関の充実、大学・都市・海外との交流、グリーンツーリズム、以上のような意見が出た。（簡単にカテゴリーで括ることは難しいのだが、おおまかに括り、具体的な細かい内容記述は省いた。）

「塾だより」を発行する

反省会を開いた後、ワークショップで何をしたのか、どんな意見が出たのかを明確にするため、ニュースレターを発行することになった。欠席した場合でもそれを見れば前回のことが分かり、参加者もすぐ振り返りが出来る。また、第三者にも『めざせ！徳地づくり達人 塾』の活動内容を知ってもらえる。

原稿はサポーターズが作り、発行は町役場です。かわら版作りのノウハウを、プロである金子さんが教えてくださり、『めざせ！徳地づくり達人 塾だより』という名前で、毎回『達人 塾』が開催された後発行されることになった。（資料4参照）

2. 第1回フィールドワーク

a. 趣旨・参加者・日時

夏休みを使い徳地のことを知るためのフィールドワークが行われた。以下は『徳地町地域づくり基本計画(仮称)の策定に伴う第1回フィールドワーク実施要領』の抜粋である。

1 趣旨

「とくぢ大好きサポーターズ」の中心的な取組の下、徳地地域全域を対象としたフィールドワークを実施し、地域資源の発掘・再評価を行うとともに、現状の問題点や将

来の地域課題を整理する。また、このフィールドワークは、地元高校生と大学生のいわゆる「高・大連携」による地域実習の取組として位置付けられる。

2 日程等

平成16年8月9日(月)～11日(水)

徳地町役場 集合・解散

参加したのは私たち『とくぢ大好きサポーターズ』、佐波高校の生徒と先生、町役場の方、金子さん、そしてそれぞれの地域での案内人の方々である。第1回『達人 塾』で挙げられた「とくぢの宝・まちの自慢」を基に、三日間のコースが決められた。

b. 1日目 出雲地区・八坂地区

1日目、午前8時半に、町役場特別会議室で出発式があり、フィールドワークが始まった。

地域資源カード

コースを回りながら、面白いものを見つけたら直ぐ記録していこう、ということで、タイトルや場所、活用可能性等が書き込めるようになっている地域資源カードが、ファイルと共に一人50枚程度ずつ配られた。

堀の街並み

まず向かったのが、町役場などもあり徳地で一番人が集まるであろうと思われる出雲地区の堀の中心部、ここで街並み探索をした。その昔活気があった頃、人々で賑わっていたに違いないどこかレトロな街並みは、今では少しひっそりとしてしまっていたが、幾つかの建物は、宮崎駿のアニメ「千と千尋の神隠し」に出てくる、トンネルの向こうの不思議の街の商店の雰囲気似ているように思えた。日が暮れるとどこからともなく明かりが点き、最盛期の賑やかさが戻ってくるのではないかという、不思議な気持ちにさせられた。昭和39年までは防府市から防石鉄道が走っていたそうだ。人々は堀のはずれの川の堤にあった駅を降り、この商店街へ足を運んでいたのだろう。

チャレンジ農場

次に、出雲神社ツルマンリョウ自生地、二の宮の大杉を車中から見て、チャレンジ農場へ向かった。ここは、新規就農者が研修を行うところ、言い換えれば農家を育てるところである。研修期間は2年間、つくられているのは、イチゴ、ほうれん草、やまのいも等である。町内の方に来てもらいたいのだが、なかなか農業でやっていこうという人は見つからないという。ハウスの見学のみならず、袋詰めの作業や冷蔵庫の中まで見せていただいた。

岸見の石風呂

次に車中から岸見の石風呂を見た。徳地町に45ある石風呂の内、現在使用できるのは4つ、その中でも使用しているのはここ、岸見の石風呂のみであり、国の指定文化財である。

重源の郷

重源の郷は山奥にある観光施設で、谷沿いに春は桜、初夏は紫陽花、秋は紅葉を楽しむことができる。再現された昔の家、紙すきなどの体験コーナー、重源上人の資料を中心にした文化伝承館、水車、麦挽きがある。郷自体が広いため、無料バスが定期的に出ている。休日は子供連れのお客さんが多いようだ。

しいたけ生産現場

昼食後は、妙見社・大イチョウを車中から見て、長年しいたけをつくっていらっしゃる藤井さんのしいたけ生産現場へ向かった。人工林の林が陰をつくって涼しい中にしいたけの原本が並んでいる。藤井さんは、大勢の前で話すのは苦手だと言われながらも、大人数で押しかけた私たちに対し大変丁寧に、しいたけづくりの方法とサル等への対策の難しさの説明をして下さった。

三谷

さて、再び車中より、徳地のお豆腐屋さんとして地域では有名な弘中豆腐店の前で、80歳というのに元気いっぱいのご主人の声を聞いた後、八坂公民館で休憩をし、棚田が広がる三谷へ向かった。こんなに美しい棚田を見たのは初めてだった。三谷の案内人・原さんの話によると、蛍の舞う季節も素晴らしいという。この三谷の棚田の風景には、桃源郷という響きが似合っていると思った。

1日目終了

最後に重源上人が材木搬出のために築かせたダムと水路である佐波川関水を見て、1日目のフィールドワークは終わった。

夜は徳地少年自然の家に宿泊して、また、サポーターズと町の職員の方との交流会が開かれた。自然の家の一室を借り、夕食を食べながら楽しく過ごした。

c. 2日目 柚野地区

柚野地区

この日は、最も北側に位置し、島根県と接している柚野地区のフィールドワークを行った。まず佐波川ダム、次に野谷の石風呂、愛鳥林、肉牛の成育現場、そして隠れファンが

多いと言われる柚木慈生温泉を訪れた。温泉水を飲ませて頂いたが、硫黄臭くあまり美味しいものではなかった。しかし良薬口に苦し、体には良いのだそうだ。

柚野拠点づくりプロジェクト建設現場

温泉を後にして、「徳地町中核都市建設プラン基本計画」の一つ、柚野の拠点づくりプロジェクト建設現場を見た。この拠点づくりプロジェクトは、柚野地区を含む徳地の5地区に、それぞれの拠点施設となるバスターミナルを新しく建設するというものである。まだただの平坦な土地であった。これだけ豊かな自然に囲まれた土地の中の平坦地が異空間に思われた。診療所や小学校も予定されているという。

林業家のお話

次に向かったのは柚野公民館、ここでは林業を営まれている戸田岸巖さんに、徳地の林業の現状や問題点についてお話を伺った。あまり意識されていないが意外と広域に渡り広がっている徳地町、その土地の89%は森林なのだそうだ。外材による日本の木材価格の低下、専業ではやっていけない現状、機械では出来ないことや、少子高齢化、労賃高による人手不足、このような原因から生じる林業の難しさを、切々と語られた戸田岸さんは、私たちに出来ることといえば木を使うこと、木工細工で徳地産の木を使いブランド化出来ないだろうか、と提案された。

国有林

この後、大原湖ふれあいパークにて昼食を摂り、滑国有林を見に、更に山奥へ入った。しかし、ここであいにく雨が降り出し、本来なら歩いて見学する予定だったコースを諦め、小型バスで奥地にひっそりと立っている江戸時代に植林されたモミの大木を見に行っただ。何百年と生きているであろうその木々は、不思議と私を優しい気持ちにさせてくれた。雨の雫が私の体に落ちてくることも、それが自然の動きであると感じることで、全く気にならなかった。やはり自然には、目に見えない何らかの力が存在するのだ、と確信した瞬間だった。

わさび生産現場

一番暑い時間帯になる頃向かったのは、今年84歳になられるという弘中忠義さんが管理しておられる、わさび生産現場だった。わさびは徳地の特産物のひとつである。人里離れた山奥で誰も汚すことがないからだろう、透明に澄み切った川を上流に向かって登って行くと、まるで秘密基地があるかのように、そこにはわさび畑が広がっていた。ほとんど自然の溪流そのもののように見えるわさび畑とその周辺の風景に触れて、ここもまた、桃源郷という言葉がよく似合う場所だと一人感慨にふけていた。水も空気も本当に澄んでおり、自分が普段生活している場との違いを強く感じた。弘中さんも、大勢で押し寄せた

にも関わらず快く見学させて下さった。

三本杉

この日の最後に訪れたのは三本杉だった。両手を伸ばせば触れることの出来る位置に、並んで立った三本の大杉である。見上げるとその頂点は遥か先にあり、人間がちっぽけな存在であるような気がした。耳をおしあててみると、水流の音のようなものが響いて不思議だった。こうして 2 日目フィールドワークも終わり、宿泊者は徳地少年自然の家へ、その他の者は解散地である役場へと向かった。

d. 3日目 島地・串地区

島地の月輪寺

最初に訪れたのは島地地区の月輪寺（がちりんじ）薬師寺だった。私にとって、月輪寺に向かう途中で見られる、平らに広がった田んぼの風景は大変魅力的であった。子供の日にはお祭りが開かれて参道沿いにはのぼりが立ち並び賑わうという。寺の奥まったところには石風呂とお礼所もあった。いつ頃まで使われていたのだろう。

島地温泉は休業中

月輪寺を去ると、少し離れたところにある雨田（うでん）公園で島地出身の僧の方から島地黙雷上人の話をお聞きし、その後、隣りにある島地温泉を訪れた。島地温泉は徳地にある2つの温泉の一つ（もう一つは柚木慈生温泉）であるのだが、残念ながら2004年の7月から臨時休業をされている。やはり客足が遠のいていることが大きな原因だそうだ。「私どもも続けていきたいんですが・・・。」私たち全員にお茶をごちそうして下さりながら言われた。サポートを始め参加者の皆が、これは是非復活させたいものだ、口々に述べていたのが印象的だった。

島地街並み探索

次に行ったのは、島地の街並み探索である。もともとは徳地和紙の集約地であり、商売の街として栄えてきた島地であったが、現在は人気あまりなくなっていた。島地温泉に活気がなくなってしまったことも、この事と関連していると思われる。街を歩いてみると、デパートのような店の看板が右から左へ書かれてあったり、古い化粧品のポスターがガラス戸越しにこちらを向いていたり、昔の映画館が残っていたりと、人々の楽しみが溢れていた場所だったことが想像された。堀の街並とはまた異なる雰囲気であった。温泉は休業中でも温泉まんじゅうは売られていると聞いたので、買ってみようと思いそのお店に入った。しかし、無添加のため夏は作らないとのことで、秋まで待つこととなった。

福田貝館

驚いたのは、こんな山に囲まれ海から離れたところに福田貝館という、貝の小さな博物館があったことだ。というのも、ここ島地には福田先生という貝の研究をされている方がいるからなのだ。並べられた貝は、細かいところまで気が配られており、美しさをより一層際立たせていた。館内は、外とはまるで別世界という感じだった。

花尾八幡宮

次いで訪れたのは、花尾八幡宮であった。ここには県内最古の獅子頭と、日本一と言える程古いガラス絵二枚が納められている。一つは長崎の出島の絵、もう一つは、当時の日本人がオランダを想像して描いた絵であった。獅子頭は、その頭の平坦さが古さを示し、奉納年代が記してある貴重なものだそうだ。

和紙の製造者千々松さん

この後、島地公民館にて昼食を摂ると、「防長三白」の一つ、和紙の製造をされている千々松さんのお宅にお邪魔した。重源の郷では紙すき体験が出来るが、そこで指導等されているスタッフの方も、千々松さんに紙すきの技術を教わっている。ここで、和紙を何枚か買うことにした。今回のフィールドワークで見出した地域資源は地図にしてまとめる予定だったが、その時使用する台紙にうってつけだと思ったからだ。

串地区

そして次に向かったのは、串である。串の公民館で地元の山本さんが案内に立って下さった。法光寺の住職の方は、ご自身による手作りの重源上人の史跡マップを見せながらお話を大変面白く話された。この方は、例えばツアーなどを行えば素晴らしいガイドをされるだろう。興味深い話は次から次へと出てきたのだが、時間が圧していたため次の目的地、長者ヶ原しょうぶ園に向かった。

しょうぶ園は 山麓にある湿地に広がっており、残念ながら時期がずれていたためしょうぶの花は見られなかった。帰り道、串地区の方が運営されているゆめ工房の横を通り、串公民館から町役場に戻った。

フィールドワーク終了

こうして三日間に及ぶ徳地町全域に渡るフィールドワークが終了した。三日間かけたとはいえ、その範囲はとても広く、全てを駆け足で見たという印象であった。最後はやはり町役場の特別会議室で解散式が行われ、参加者それぞれが感想を述べて終わった。

3. 第2回『めざせ！徳地づくり達人 塾』 9月4日

『めざせ！徳地づくり達人 塾』第2回目は、徳地町文化ホールで開催された。

フィールドワーク成果報告

まずは会場に貼られたフィールドワークで記入していった地域資源カードと、それを基に作った地区別地域資源マップを見ながら、私たち『サポーターズ』がその成果を発表した。

グループワーク

今回のテーマは「地域資源と地域の課題」だった。第1回『達人 塾』用に役場の方が構成して下さったグループ分けをそのまま使い、4～5人×10班で話し合った。グループワークでは、まちづくりをする上での課題と、そのために活用出来そうな徳地の地域資源を、フィールドワークの成果も参考にして議論した。そしてグループ内で意見が多かったもの上位5つを「まちづくりの5大課題」としまとめ、発表した。

グループワークの結果

「めざせ！徳地づくり達人 塾だより」第2号より、1班から10班までの「まちづくりの5大課題」を以下に抜粋する。 から意見の多かった順にまとめてある。()内は、課題を解決するために活用できそうな徳地の地域資源である。

1班

地産地消を進めよう(わさび、しいたけ、木炭、有機野菜、木材、ヤマノイモ)
徳地の自然を生かそう!!(ほたる、しょうぶ園、野草)
史跡PR(重源の郷、三本杉、白石山、妙見社の銀杏、西宗寺の桜、岸見石風呂)
働く場所づくり(林産物加工場、農園、特産物ショップ、etc)
後継者づくり(地域の人材)

2班

徳地のPR大作戦(重源の郷、雨田公園、わさび、ヤマノイモ、石風呂、銘菓)
徳地新開発(米、観光農園、水)
交通網の充実(バス)
定住者Get!!(空き家、休遊地)
総合病院を作ろう(廃校利用)

3班

観光施設の充実(三本杉、重源の郷、石風呂)
観光・名所のPR・宣伝(地域拠点、南大門、道の駅)
特産品づくりと販売(和牛、わさび、米、和紙、しいたけ、道の駅)
若者定住(空き家、林農、農業)

人財（人は宝なので）発掘（法光寺のおしょうさん、その他大勢）

4班

若い人が生活したいと思うような町づくり

（ごみごみした町は嫌いな人、農繁期にはお手伝いに帰る人を大切にする）

徳地の山や自然のすばらしさをもっと知りたい・知らせたい

（白石山、三本杉、飯ヶ岳などのアピール）

純徳地米のおいしさをもっと知ってもらおう（100%純徳地米）

地区間の交流がやすい（祭りで地区間の交流）

高齢者の力が生かされていない（高齢者のパワー）

5班

特産品の再確認と開発

（しいたけ、わさび、松茸、そば、お茶、温泉まんじゅう、こんにやく、とう
ふ、ヤマノイモ、あゆ、徳地米、赤米、いちご、野菜、腐葉土、徳地みそ、
酒、牛、蜂蜜、未知の地下資源）

自然環境と歴史（史跡）の見直しと整備

（佐波川、重源の史跡、ウォーキングコースか地域資源コースマップ、滑の溪
流、白石山のハイキングコース）

交流の場づくり（河川敷の利用、スポーツ、散策公園）

働く場の創造（徳地のものを食べさせるおしゃれな店、あるものプラスの工夫）

島地温泉の復活（島地温泉水に間伐材燃料を利用、産品売り場・駐車場もつくる）

6班

とくぢブランドの確立（米、しいたけ、わさび、ヤマノイモ）

移動手段の確保（小型バス）

地場産業の育成（休耕田の活用、林業の育成）

とくぢのPR（ホームページ、ケーブルテレビ）

病院の充実（出張診療、廃校の活用）

7班

PR（国宝文化財、特産品、お祭り）

人材と交流・実践（地域の有名人・文化人）

観光案内（佐波川の源流）

自然の保護と活用（牛、山羊、ウサギ、魚、鶏、カニ、蛭、山林、棚田、石垣）

住みやすさ（自然環境）

8班

自然を活かした活性化（森林、水、空気などあらゆるもの）
特産品の開発と宣伝（米、しいたけ、わさび、ケーブルテレビ、郵便局等々）
住宅の整備と空き家の利用（土地と空き家）
コミュニティバス（防長バス）
世代をこえたふれあいの場づくり（学校、公民館、地域の高齢者）

9班

自然の活用とふれあいの促進（森林、清流、風景）
徳地といえど づくり（米、しいたけ、木材）
都市部・若者との交流促進（重源の郷、三谷交流センター、チャレンジ農場等）
地域づくりは人づくり
重源上人の史跡のピーアール（重源の郷、史跡全般）

10班

特産品・徳地ブランド・人材育成
（わさび、しいたけ、そば、チャレンジ農場、温泉まんじゅう）
自然保全（竹、滑の国有林）
経験に学ぶ（経験データベース）
文化イベントできる施設（文化ホール、学校、交流センター）
ボランティア・グリーンツーリズム・ホスピタリティ（地域住民）
地域全体の交流（歩こう会）

10班分の意見をまとめ、キーワードが見えてきた。まずは「人材・交流」、そして「自然資源」、「特産品・ブランドづくり」、「住みやすさ」、これらの意見は大変多く、その後の活動のポイントになるのではないかと考えられた。続いて「観光」、「徳地のPR」、「農業」、「歴史」、「労働」、「交通」、「医療」といったキーワードが挙げられた。

4. 第3回『めざせ！徳地づくり達人 塾』 10月2日

『達人 塾』の中止と宿題

本来予定されていた第3回『達人 塾』は9月18日であったのだが、台風 号の被害によりこの日は中止になった。このことで、本ワークショップは全部で9回ではなく8回に減ってしまった。とはいえ、3回に分けて議論する予定だった「何があるか」という第一ステップは早く進み、ほぼ終わりがかけていたので、10月2日の第3回『めざせ！徳地づくり達人 塾』では、第二ステップ「何が出来るか」に入ることにした。そこで、10

月2日に向けて参加者の方へ宿題を出すことにした。「徳地づくり わたしの提案」という題で、事業案を書いてきてもらうのだ。

第3回活動内容

さて、いよいよ迎えた10月2日、まずはコンサルタントの方が、『徳地町 中核都市建設プラン基本計画』と「徳地づくり わたしの提案」を照らし合わせ表にまとめ、コメントされた。ここで、「わたしの提案」を出された方にも前に出てもらい、発表をしてもらった。そして表を使い、それぞれの案について「自分でやりたい」「人がやるなら応援したい」という欄を設け、投票を行った。皆がどのようなことに興味をもっているのかが少し見えてきた。

投票の結果

投票結果については、第3回『達人 塾』への参加者が少なかったこと、投票用の表を何度も練り直し作り変えたこと、第4回において移動した票が沢山あったことなどから、ここでは省く。

5. 第4回『めざせ！徳地づくり達人 塾』 10月23日

第4回『めざせ！徳地づくり達人 塾』は、行事が重なったこともあり前回に引き続き参加者が少なめだった。前回の欠席者による「徳地づくり わたしの提案」の発表があった後、訂正された『基本計画』と「わたしの提案」の照らし合わせの表に、「自分がやりたい」「徳地に必要だと思うこと」の二つの欄を設け、それぞれの案に対しての再投票を行った。そして、投票の結果成立したグループごとに集まり直して、個々の案の具体化を行った。

再投票・グループワークの結果

再投票後のグループ分けであるが、あれこれ討論した末、6つのグループに分かれた。そして、何がしたいのかを話し合って終わった。(資料5参照)

6. 第2回フィールドワーク 10月24日

a. 趣旨・参加者・日時

第1回フィールドワークが「もの」中心だったのに対し、今回は「人」をテーマとしたフィールドワークを行った。これから様々なことに取り組むに当たって、成功例の活動を参考にさせて頂きたいと思い、インタビューさせていただいた。第1回フィールドワーク同様、メンバーはサポーターズ、佐波高校の生徒・先生、徳地町役場の方、コンサルタントの方であった。質問は県大生と佐波校生で分担して考え、予め用意しておいた。私は、この機会に是非、彼らの理想郷像を知りたいと思った。以下は『徳地町地域づくり基本計

画（仮称）の策定に伴う第2回フィールドワーク実施要領』の引用である。

1 趣旨

徳地で積極的な活動をする方々の意見、想い、ノウハウ、課題等を聞き取り調査し、検討を加えていくことで、今後の地域づくり計画の策定や重点事業の実施に活用する。

なお、今回のフィールドワークは山口県立大学生を中心とした「とくち大好きサポーターズ」と地元佐波高校生との高・大連携による取組として実施する。

2 実施予定日

平成16年10月24日（日）

徳地町役場 集合・解散

b. 新規就農者 浅村久志・栄子さん

24日の朝、まず訪ねたのは、徳地町に住んで四年目を迎えるという新規就農者の浅村久志・栄子さんであった。以下はフィールドワークの記録集からの抜粋である。

新しく農業を始めたい人が、そのノウハウを学ぶことの出来る「チャレンジ農場」で二年間研修をされ、現在佐波川沿いの畑でイチゴをつくっていらっしゃる。つくられているイチゴの品種は、とよのか、さちのか、べにほっぺの3種類で、べにほっぺは試作中だという。握りこぶしほどの大きさで、味も大変よいとのことなので、是非食べてみたいと思った。

イチゴ園を始めようと思われたきっかけは、田舎が好きなのにサラリーマン生活をしていることへのジレンマに耐えていたとき、（それまではあまり意識したことがなかったのでたまたまなのかもしれないが）そのころテレビ番組でも田舎暮らしをとりあげたものが多く、農業っていいなと思ったことなのだそうだ。ご両親の実家が徳地で既知の土地であったこと、実家が防府でご両親が近くにおられること、友達も近くにいて会って気分転換が出来ること、などの理由から徳地町を選ばれたそうだ。他の地域ではイチゴの作り方を教えてくれない事も多い中、一から丁寧に指導して下さった桑原さんを始め、周りの方々から大変可愛がってもらっているそうだ。栄子さんも、人間関係に恵まれている点、静かで自然に囲まれている点に魅力を感じ、これなら子供ものびのびと育てられるだろう、とおっしゃっていた。マイペースで自分のリズムに合わせて生活することを人生のこだわりとされ、「イチゴの成育においても、自然が相手なので、自分の努力と、それ以上のことは天にまかせるようにしています。」とおっしゃった。これからの夢をお聞きすると、まずは借金を返し、ハウスの近くに家を建てること、そして徳地全体で徳地ブランドのイチゴを作り、一つの産地として皆で仲良く協力していくこと、と笑顔で答えて下さった。

c. 自由創作いとう

次に訪ねたのは、「自由創作いとう」、徳地町で暮らす伊藤さんご家族が営む創作工房である。父・文男さんは木工、母・雅代さんは染物や織物、長男・太一さんは吹きガラスや木工、長女・実起さんは旅行先で見つけた布、ビーズを使った服やアクセサリー作り、次女・友美恵さんは子供に英会話を教えながら葉書を中心に紙すき、といった風に、各自がそれぞれの創作活動をされている。太一さん、実起さん、友美恵さんの三人は、アメリカ留学中に始めたアフリカ太鼓の演奏活動も続けていらっやって、この日も実起さんと友美恵さんは広島で演奏会があるとのことでお留守だった。

伊藤さん一家が周南市（当時は徳山市）から現在住まれている徳地へ来たのは、2000年だった。文男さんは、先代から受け継いだ商売があったのだが、向いていないと思い、どうせ苦しむなら自分の好きなことで苦しみたいと商売を辞め、約2年半前から木工に取り組むようになった。太一さんも小さい頃から家業を継ぐ気でいたが、20歳頃に自分のやりたいことが見えてきて、芸術の道に進むことを決心したという。

徳地を選んだきっかけをお聞きすると、文男さんはこのように述べられた。

「周南市に住み始めた頃は家の周りが田んぼでしたが、時と共に住宅地になっていきました。木工やガラス細工は騒音が出るので、周りに家があると近所迷惑になってしまいます。新たに暮らしていく土地選びの条件は、騒音が迷惑にならないよう、家から見えるところに民家がないこと。ガードレールがないこと。何時間もかかるような山奥では困るので、幹線に直ぐ出られるところであること。近くを川が流れていること。これらの条件を満たす土地を探していたところ、今の場所を発見したのです。いい川でしょう、家の前の道も川も両側の山も町のものですが、まるで自分達のもののように大切に思っています。」

徳地に欠けているもの、徳地だから苦労したことについては、思い当たらないほど徳地が気に入っているようだ。まさに今暮らしているここが理想郷そのものです、とおっしゃったのは雅代さん。土地選びの際、様々な場所を見に行き、どこもいまいちだった中、今の場所に来たときはピンときたのだそうだ。「今暮らしているここが理想郷そのもの」、この言葉は衝撃的であった。なかなか言えることではないと思う。これこそ理想郷だと言える土地で、大好きな人と一緒に自分のやりたいことをして生活していく、こんなに素敵で幸せなことはないのではなかろうか。

d. 伊賀地の郷 味工房

伊藤さんのお宅で昼食を摂らせていただいた後、三軒目の「伊賀地（いかぢ）の郷 味工房」を訪ねた。この味工房は、営農グループが地域の活性化を目指し、地域の素材を活かした安心・安全な加工品づくりに取り組むと共に、消費者との交流を促進しようという目的で設立された。県・町の地域づくり指導者の下、伊賀地営農クラブの会員が自主・自立・連帯（自己決定・自己負担・自己責任）の精神をもって新たな地域活性化のための事業にチャレンジしている。伊賀地営農クラブ代表者である藤井義弘さんは、徳地で学校教

諭をされていたが、定年後、教え子達の誘いに後押しされ、この試みを引き受けられたそう
うだ。「先生」の愛称で呼ばれ、「生き甲斐づくり、健康づくり、仲間づくり」をモットー
とされている藤井さんにお話を伺った。

「伊賀地の郷 味工房」は、その名の通り伊賀地にあり、現在販売している品は餅、柏
餅、イチゴジャム、漬け物、地物の野菜、そしてお米の粉で作った「米っこパン」である。
味工房で販売するだけでなく、野菜等は萩・宇部・防府・下関・周南、そして我々県大生
にも身近なビッグ大内店などでも販売されている。土の匂いのする野菜を、「家庭菜園のお
すそ分け」として出されているのだそうだ。販売の他、消費者の皆さんと「芋掘り交流会」
を毎年行っているという。

藤井さんご自身は、小学1年生の時から64年間、ずっと徳地に住んでいらっしゃるそ
うだ。「徳地に腰を据えて何十年も住んでいるから、この土地から逃げられない。だからこ
そ、ここで何かやってやろう、住みよいぬくもりのある故郷にしたい、という気が起こる」
このようにおっしゃっていた。徳地米100パーセントの「米っこパン」づくりを目標に、
伊賀地営農クラブが地域づくり、農業元気付けの場になれば、との願いを込めて活動され
ているそうだ。対話と協調を大切にし、どこまでも夢を追いかけるその姿は、とても輝い
ていた。

藤井さんを「先生」と慕う元教え子の女性達もはじけるような笑顔と元気で私たちを迎
えて下さり、「女性が輝いている地域には未来があると感じた。」と同行した安溪遊地先生
は印象を語っておられた。

e. ねむの木

この日最後にお訪ねしたのが、佐波川沿いのレストラン「ねむの木」だった。「ねむの木」
といえば、地元の卵を使ったオムライスが美味しいことで有名である。私も、その評判
を聞きつけお店に足を運び入れた一人である。お店がとても忙しい時間帯に訪ねたにも関
わらず、二代目の島瀬 さんが快くインタビューに応じてくださった。

「ねむの木」は、喫茶店として平成元年にオープンした。地元由来の名前をと考え、
昔、佐波川沿いにたくさんのねむがあったことからお店の名前をつけられた。徳地町・掘
集落にお店を建てられたのは、お父さんが呉服屋を経営されており堀に土地をもってい
らっしゃったからだそうだ。こんな景色のいい所で是非何かやってみたい、と思われたとい
う。

卵や豆腐を中心に、地元で採れるものを素材として美味しく活かし、お客様に提供され
ている。注文が多くなっても、仕事をこなすだけにならないよう、一つ一つお客様のこと
を考えながら心を込めて作る事を心掛けておられる。そんな島瀬さんに、島瀬さんにとっ
ての徳地の魅力をお尋ねすると、

「人が少ないことです。正直、もっと少なくてもいいです。そして田舎であるというこ
とです。田舎にお店がぽつんとあるととても目立つんです。また、自然が当たり前のよう

にあるというのは素晴らしいことです。」

また、逆に徳地に欠けていると思う点についてお尋ねしたところ、

「ないものねだりはしないので、あるもので何とかします。住民の方が気付いていない良さがたくさんあるんですよ。」

とお答え下さった。物ではなく、人間関係・コミュニケーションを大切にされている。これからの夢としては、お客さんと一緒に野菜も作っていききたいそうである。最後に理想郷像をお聞きしてみた。

「大学で東京に出たんですが、旅がとても好きで、ある日新潟と福島の間境にある山深い温泉に行きました。冬は全く人が足を踏み入れることのないような山奥で、そこで夜見た星はとてもきれいでした。自分にとっての理想郷はあそこだと思います。」

昔の人はこのような風景を見ていたんだなと語り合われたそうだ。

7. 第5回『めざせ！徳地づくり達人 塾』 11月20日

佐波高文化祭

第5回『めざせ！徳地づくり達人 塾』が行われた11月20日、スタッフは、いつも通り午前10時に、会場である山村開発センターに集合した。この日はいつもより準備することが少なく、高校生の参加者が文化祭で『めざせ！徳地づくり達人 塾』の活動の発表をするというので、佐波高校へ見学しに行った。パワーポイントを使用した、スクリーンを用いた発表だった。

フィールドワーク成果報告

開始時間が近づくにつれ、顔なじみの参加者が集まれ、折り返し地点とも言える第5回『達人 塾』が始まった。いつも通り前回の振り返りをした後、第2回フィールドワークの成果を、ビデオを用い高校生と共に発表した。

最終的なグループ決定

前回つくったグループの再編成を行った。少人数のグループを、関連がありそうなグループと一緒にまとめてしまったことがあまり良くなかったのだろう、意見がなかなかまとまらず進まないグループが出てしまったのだ。また、話し合いをして気持ちが変わる人もいるだろうと考え、この日が最終的なグループ決定の日となった。

二人のゲスト

コンサルタントの方からは、これまでの経験や知識から、アイデアづくりのための様々な情報提供があった。まちづくり仲間の行重礼晃さんも呼んで来られ、ワークショップ自体を盛り上げてくださった。

また、田布施からわざわざ来て下さったログハウスビルダーの岡部正彦さんによるペレ

ットストーブの展示・実演が会場内で行われ、参加者はその魅力に惹きつけられていた。

グループワークの結果

再編成をした結果、全部で9グループできた。この時のそれぞれの案を簡単に紹介する。

一つ目のグループ「徳地ガイド」は、早くも3～4月に東京方面から10人のツアー客を呼び、徳地の見所を回る「春休みツアー」を企画した。体験も数多く盛り込まれており、一週間コースと三日間コースがある。

「教育文化交流」は、県立大学生との交流、県外・海外の人との交流を目的に、徳地ならではの、または他地域ならではのイベントや体験教室を開き交流を図ろうというものである。

「グリーンツーリズム」は、都市と農村の交流を目的に、都市から訪れる人たちが森林等徳地の自然を活かした体験ができる場をつくるというものである。彼らの第二の故郷を目指している。

「徳地米」は、美味しいと評判の徳地のお米をブランド化し、もっと広めようということで、他の特産品と組み合わせたおにぎり販売、おにぎり日本一コンテスト等考えている。

「のびのび*あいあい」は、働く女性と育児の支援を目的に、ファミリーサポートセンター、常時保育、託児サービスシステムづくり、シニアボランティア等を提案した。

「ハイハイ*コウコウ」は、廃校利活用のグループである。廃校を宿泊施設にし、化学物質過敏症の方やアトピーの方の癒しの場、高齢者アパート、山村留学生の宿舎をつくらうというものだ。ここで働くスタッフは、世話されるより世話したいという地元のお年寄りなのだ。

「島地の湯」は、臨時休業中の島地温泉の復活をきっかけに、島地地区を活気があり人が集まってくる場所にしようとするグループである。朝市の復活、商店街の復活、道の駅づくり、イベント強化等、この班は最も勢いがあり、これからの具体的な動きも見えているようだ。

「元気一杯パワフル串人」は、串地区の活性化を目指し、マップ作り、串全体の観光地化、ブランド作りを進めたいと考える。これまで民泊の実績があるのでそれも活かすようだ。

最後に「高齢者見守り事業」のグループだが、メンバーが都合により欠席されていた。

第6回以降は、以上のグループで事業案を考えていき、来年から何をするか、何が出来そうか、誰の助けが必要か、資金は、等具体的な内容を議論していくことになった。

8. 第6回『めざせ！徳地づくり達人 塾』

12月4日、2004年最後の『達人 塾』が、いつも通り13:30～16:30の間、徳地町山村開発センターで開催された。前回のグループで、引き続き事業案の実現に向けての具体化をしていった。今回はとにかく詳細を決め、すぐにでも取り掛かれるくら

いまで進めること、つまり企画書づくりが目標とした。『達人 塾』の最終回である第8回には、この時作成した企画書で事業案の発表会が開かれる予定だ。これによって、これまで半年かけて作り上げてきた案が実施されるかどうか決まると言っても過言ではない。ほとんどのグループは時間内にまとめる事ができず、後日個別に集まって話し合うことになった。

・ 討論

A. 記憶の中の風景

ほとんどの人が記憶の中に、その人にとっての懐かしい風景を持っていると思う。私の場合、特に思い出されるのが、外で活発に遊びまわっていた頃の記憶に刻まれた風景である。例えば、3キロの道のりを歩いて通っていた小学校の通学路、2～3ヶ月に一度訪ねるのを心待ちにしていた徳地町の祖母の家などである。

なぜこの頃の記憶なのかを自分なりに考えてみた。一つ目に言えるのは、あの頃は何もかもが新鮮であり、冒険であったということだ。今思えば些細なことでも、当時の私にとっては興奮して眠れないほどワクワクすることであったり、嬉しくて仕方ないことであったり、また時には明日のことを考えてなかなか寝付けないほどの悩みであったりした。子供独自の視点や感受性を持っていたからだろうか。同じ出来事が起こっても、その時の感じ方によって、記憶にどう残るかも異なってくると思う。冒険の日々は私の胸に深く刻まれていったのではないだろうか。

二つ目に、それが幸せな日々であったからだと考えられる。私は家族を含め周囲の人から十分愛情を注がれていたと思うし、毎日誰かと遊ぶのが楽しみで仕方なかった。特に遊具・玩具がなくても、どんなものでも、いくらでも楽しく遊べた。よく、このまま時が止まればいいのに、などと思ったものだ。

そして最後に、思い出というものは美化されているのではないかということが考えられる。これは私のプラス思考の性格から起こることかもしれない。昔の出来事を思い出す時、その出来事のよい部分や楽しかった部分を中心に思い出すのだ。これまで忘れられないほどの辛い経験をしたことがないからかもしれないが、その時感じた多少の苦しさ・マイナス面は、徐々に忘れていってしまうようだ。例えば私は大学でワンダーフォーゲル部に所属していたが、合宿や錬成時の辛さを忘れ、まず思い出すのは楽しかったことばかりである。そしてその楽しさだけを求めてもう一度合宿へ行きたいと思ってしまうのである。

楽しかった思い出と共に、その背景に存在した風景は、一つの理想郷のイメージとしていつまでも記憶に留まるのではないだろうか。私にとってそれは、自然に囲まれた、田畑の広がる田舎だった。だから田舎の風景が好きなのもかもしれない。懐かしい、昔見た情景と重なるような風景を見ることで、記憶が呼び起こされ、時を遡って幸せな気分になれるのではないだろうか。と同時に、もうもどることも出来ないその時代を慈しみ、切ない気持ちにさせられるのかもしれない。私にとっての桃源郷は、こうした昔の記憶の中の風景

と重なっているような気がする。

B. 歴史の中で描かれた理想郷

1. 『桃花源記』

歴史の中でも、様々な人物が理想郷を描いている。例えば、中国の陶淵明という詩人が『桃花源記』を記し、桃花源という理想郷を語った。以下は、『桃源郷ものがたり』(松居直)の中の「新たに語り伝える理想郷」からの抜粋である。

陶淵明は、中国古代の晋時代、西暦365年に生まれ、南朝の宋時代のはじめ、427年に63歳で没した、古代中国を代表する田園詩人として、中国だけでなくわが国でも古くから崇高されている大詩人である。

(中略)

陶淵明が『桃花源記』を語って以来、桃源郷という言葉は戦争のない、平等に助けあって人々が暮らしている理想社会=ユートピア(後に述べる)を現わす代名詞となった。

Web ページ「桃花源～古典的劉徳華世界～」より、『桃花源記』の内容を以下に記す。

晋の時代の太元年間(376～396年)のある日、ひとりの年老いた漁師が、とある水路を見つけてずんずんと進んで行きます。道の両側には桃の花が植わっており、その桃の花に導かれるようにして水路を進んで行くと、やがて桃の花は尽き、一つの山に行き当たりました。山には小さな入り口があって、人ひとりがようやく入ることのできる入り口からさらに奥に進んでいくと、視界が開け、そこには広々とした土地に豊かな田畑、池、緑が溢れています。その土地に暮らす人々は、漁翁にとっては着ている服なども珍しく感じられるものだったけれど、平和に、穏やかに楽しく暮らしている。話を聞くと、住人は秦の始皇帝の頃に、その圧政から逃れるべくこの土地に隠れ住んだ者たちの子孫であるという。とうに秦は亡く、漢も三国も過ぎ去ったということさえ知らぬ人々。それでも彼らは、身分の上下などなく、争いごともなく、つまりは何の憂いもなく暮らしていたのです。漁翁は数日滞在し住人に歓待されましたが、漁翁が去るに及んで、この桃源郷のことは口外してくれるなど住人は頼みます。が、漁翁は帰り道に目印をつけ、領主に桃源郷のことを語ってしまいました。果たして、領主が漁翁を先達として桃源郷を目指してみても、何故か目印は役に立たず道に迷ってしまい、結局桃源郷に辿り着くことはできなかったのです。

2. 『桃花源記』の解釈をめぐって

『桃源郷ものがたり』の中の「新たに語り伝える理想郷」で、著者は以下のように述べている。

陶淵明の生きた時代は戦国争乱の悲惨な世のなかで、人々は平和でゆたかな暮らしに心からあこがれていた。その気持ちを理想郷に託して描きだしたのが『桃花源記』である。物のあふれたぜいたくな暮らしよりも、質素で心の安らぐ田園生活のなかに真のゆたかさがあることを、陶淵明は桃源郷の物語として語っている。

門脇廣文氏の Web ページ『陶淵明 桃花源記 小考 従来の理解とその問題点について』によると、1991年に内山和也氏の『桃花源記』の構造と洞天思想 が公表されて以来、『桃花源記』がどのような世界を描いているのか(「なに」を描いたのか) 作者が『桃花源記』を自己の考えを表すものとして描いたのか、それとも現実の出来事を単に記録しようとして書いたのか等、様々な説が盛んに論ぜられるようになったようだ。例えば内山氏は、『桃花源記』に対する捉え方を以下の四つに分類している。

仙境説。桃花源は仙境を描いたものだとする考え方。

避世説。世を避けた人々が集まった実在する桃源郷について、実際に語り伝えられている話を記録したものだとする考え方。

寓言説。現代社会についての思いをほのめかしたもので、全体的に寓言であるとする考え方。

考証実在説。実際に桃花源があったとし、考証してその場所を決定しようとする考え方。

同様の分類は、1981年すでに、上里賢一氏も行ってたようだ。また、上田武氏は、「まさに無数といってよい文人たちが、それぞれの思いをこめて桃花源を語ってきた。しかし前近代においては、イメージとして再構成された桃源は窮極的には二つの類型に尽きている。」

と述べ、以下のように分類した。

現実をまったく隔絶した仙境としての桃花源。

この世と同じ次元の、実在する絶境としての桃花源。

そして『桃花源記 小考』の中で門脇氏も彼なりの分類をしているが、ここでは省く。以上のように、桃源郷という言葉の基となった桃花源は、その位置付け、強いて言えば定義が未だ曖昧であり、謎を多く残していることが分かる。

しかし、陶淵明が田園を、緑を、自然を、そして田園生活を愛していたことは確かであろう。彼の生きた時代から1500年以上経った現在でも、地球のどこかで絶え間なく戦争が起こっているからだろうか、彼が平和な世界をどれだけ望んでいたか、時代を超えて

ひしひしと伝わってくる。『桃花源記』が、これまで高校の教科書にもしばしば載せられてきた訳には、比較的読みやすい漢文であることに加え、時代を超越した陶淵明の平和への願いを若者に伝えたいという思いが込められているのかもしれない。

人々の生き方を含めた彼の理想郷のイメージは、それが実在していたのであれ、そうではなかったのであれ、やはり『桃花源記』に記されたものだったのではないかと私は思う。彼の故郷は田園であり、41歳で故郷に帰り隠棲したという。そして、田園の生活や隠者の心境を歌い、一派を開いた。幼少期の故郷での思い出、家族との幸せだった暮らしを思い浮かべながら理想郷を描いたのだろうか。遠い日の記憶によって多少デフォルメされている部分があるにしろ、陶淵明の幼い頃の暮らしは、桃花源での暮らしそのものだったのかもしれない、そう思うってしまうのは私だけだろうか。いや、上里氏、内山氏によるの説、上田氏によるの説があるように、また、陶淵明の『帰去来辞』で「故郷に帰り田畑を耕そう」という内容を記していることが、詩人の世界の一つの出発点となっていることから、考えられなくはなさそうだ。そう考えると、後世に大きな影響を及ぼした偉大な詩人が、ひとりの人間として私には身近に感じられてくる。

3. 「小国寡民」

老子は『老子』第80章で「小国寡民」という思想を述べている。この思想は、陶淵明の『桃花源記』に大いに影響を与えていると言われており、国は小さい方がよく、人口も少ない方がよいとするものである。

Web ページ『[研究ノート]フンザの春 小国寡民の研究』で、著者は「桃源郷の条件は小国寡民」題し、以下のように述べている。

中国文学者守屋洋が1973年12月、馬王堆3号漢墓から出土した「帛書老子」に基づいて訳出した「老子」によると、老子が描く理想の社会あるいは国は、小さくて、人口も少ない「小国寡民」である。かりに文明の利器に恵まれたとしても、人々は見向きもしないで、人生を楽しみ、他所へ移ろうとしない。船や車があっても乗ろうとしないし、武器はあっても手にとろうとはしない。敢えて読み書きを習おうとしない。それぞれの生活に満足し、それぞれに生活を楽しんでいる。鶏や犬の声が聞こえてくるようなすぐ近くに、隣りの国があっても、往来する気などさらさない。

そういう国は、国というよりむしろ 小さな村落共同体 自給自足の経済体制 反文明の自然社会 隔絶した閉鎖社会 である、と守屋は老子流「理想国家」を位置付ける。

しかし、私は守屋氏とは異なる解釈をした。老子は、自然の中での質素な生活を理想とした。自然に出来る集落は小さく、そこに住む人口も少ない、しかしその中でこそ人は自立し、且つ自然な姿でいられ、毎日を幸せで穏やかに過ごすことが出来るのだ。船や車に

乗らないということや、「敢えて読み書きを習おうとしない」というのは、生活の知恵について述べているのではなく、それがその地で自立して生きていくために必要なことではない場合のことを示しているのだと思う。このような生活の中では敢えて交流しようとしなくとも、人と人の強い繋がり、そして人と自然との繋がりには自然に生まれるだろう。私にとってそれは、「閉鎖社会」というより、むしろ解放的な社会に思える。

第2回フィールドワークでお会いした島瀬さんは、老子と類似した考えを持たれていたのだということに気づき、「小国寡民」の考え方は現代にも通ずるところがあるのだと感じた。『達人 塾』において、人が多く賑やかな町の方がよいのだという先入観を持っていた参加者は、島瀬さんの考えを聞き、目から鱗が落ちたに違いない。

4. ユートピア

「ユートピア」という言葉は、16世紀ルネサンス時代、イギリスでトマス・モアの文学作品『ユートピア』(1516)によって作られたもので、ギリシア語の「どこにもない所」という意味である。『ルネッサンス双書4「ユートピア」』によると、ユートピアの定義は、

現在は一般的に「遠い創造のくに、理想社会、実現不可能な理想社会像」(『オックスフォード英語辞典』一巻四八五ページ以下参照)

となっている。しかし『桃花源記』以上に、「『ユートピア』をどう定義するか」という『ユートピア』研究は数多くされてきており、それに対する見解は研究者によって異なっているのが現状である。ここまで私が取りあげてきた以外にも、世界中でたくさんの理想郷が描かれている。例えばギリシャの「イスベリデスの園」、ローマの「エリュオン」、イスラエルの「エデンの園」、北ヨーロッパの「アスガルド」等である。しかし、ここでは深入りしない。

いつの時代にも人々は理想郷を思い描いていたことが分かる。どこまで深く追求していくかは個人個人異なるにしろ、誰もが一度は考えることなのかもしれない。

C. サポーターズの活動から学んだこと

1. 柚野の建設現場にて

第1回フィールドワークで柚野の拠点建設現場を訪れた時、環境破壊にはならないのだろうかというのが第一印象だった。小学校が危険となったために移築を余儀なくされたことが一つのきっかけだとしても、わざわざ新しく近代的な建物を建設する必要があるのか、ないと住民が困るほど重要なものなのだろうか、いまある施設ではダメなのだろうかと思った。医療面、お年寄りにとっての利便さを考えたらやはり必要なものなのだろうか。私にはそういった知識も経験もなく、本当に必要なものであるのかが分からないが、妙に人

工的なものに見えてしまった。

2. キーワードは「交流」

キーワードは「交流」、これは『達人 塾』が始まってすぐに浮かび上がってきたことだった。住民の方が声を揃えて言われたのは、五つの地区、それぞれの中での交流はあっても、地域間の交流はほとんどされていなかったという。また、年配の方々と高校生をはじめとする若者とが真剣に語り合う場もなかったらしい。私にとってもそれは、親戚や大学の先生を除いた、年配の方との初めての語り合いの場であった。年代を越えた語り合いは実に面白く、初めはただサポーターとしての役割を果たすことで精一杯であった『達人 塾』が、すぐに大きな楽しみへと変わっていったのだった。

参加者の女性から、

「こういうことがやってみたかったです。」

という声を聞いた。思い起こせば、15歳から71歳までという参加者の方々は、1日目の自己紹介の時から生き生きとされていた。

「こうやって今ここに集まって皆で話し合っていること自体がとてもいいんですよ。これがとても大事なんですよ。」

これは安溪貴子先生の言葉である。ワークショップ自体が実は立派な交流であって、人と人とを繋ぐ素敵なものなのだ。ここで出会う人々との間に出来た繋がりこそが大きな財産になるのだということに気付いた瞬間であった。参加者は徳地町内の方だが、サポーターズは山口市、阿武町、防府市など、全県的な広がりを見せている。そこに地域を越えた交流の魅力も生まれはじめている。

ここで思い当たる事があった。それは、私にとって第二の家とも言えるニュージーランド、ウェリントンの思い出である。約8ヶ月間の日本語アシスタントを終えて帰国が近づく頃には、ウェリントンがもうすっかり自分の街のような気分になっていた。もっとここにいたい、とよく思いまた口にしていたものだ。日本で生活している現在でも、常にニュージーランドを恋しいと感じている。徳地でのワークショップをしているうちに、それは、そこで知り合った人々と会いたいからなのだとということに気付いた。もし私が、誰とも付き合わず、一緒に何かすることもなく、1人で過ごただけであつたら、それほど戻りたいとは思わなかつたらう。知り合った皆がいるから、だからその街が大好きなのであり、彼らが私を笑顔で出迎えてくれるから、そこが私にとって第二の故郷と言えるような、特別な街として存在するのではないかと思う。

このように、国境や民族の壁さえやすやすと越えることがある人間的な交流のもつ深い魅力は、徳地の地域づくりに関わる中で大きく浮かび上がってきたものである。

3. 自然とは

第1回フィールドワークにて、地域資源カードというものを作成した。サポーターズが

後日それらをまとめたのだが、カードの分類分けには少々手間取った。私にとって一番興味深かったのが、「自然」という分類をする場合、どこまでを自然と言うのかという点であった。

例えば、山は自然であると言えそうだが、実は全ての木が植林という山も多い。それを自然と言ってしまってよいのか。また、佐波川を見てみると、川自体は自然なのかもしれないが、その周辺については人間の手が加わっている。これも自然なのだろうか。このようなことを考え出すと、「純粋な自然」と言うものは我々の身の回りには存在し得ないのかもしれないと思えてくる。

しかし私はさらに考えた。例え人間の手が加わっていても、それが月日を経て周りとは一体化していけば自然の一部になり得るのではないか。植林された木々も、佐波川周辺も、周囲の生き物に受け入れられて共存することができれば立派な自然であろう。万物は形を変えていくのであるから、人間の手が加えられることも、時の流れの中で起こる自然なことのひとつと言えないだろうか。もちろん、手を加え過ぎることについては大反対であるが。そして手を加える人間自身、自然の一部と言えるだろう。

ゆっくり変化する自然に対する現代人の目まぐるしいまでの介入は、急激過ぎて不自然なことなのかもしれない。あまりに不自然なことが続けば、そのしわ寄せがいつかしっぺ返しとして帰ってくるに違いない。

田舎の風景や、私がニュージーランドで見た風景、また祖母の家の周辺の風景、それらは周りに溶け込むようにゆっくりと変化し、歴史の中で人々が自然と共生してきた生活が現れた風景なのではないだろうか。慌ただしい現代社会の中で、私は人間味のある、その土地その土地に合った人々の生活を無意識に恋しく思っているのかもしれない。だから自然と人との共存が表れている田んぼのある風景や田舎に懐かしさを感じるのではないだろうか。そしてそれは、人間誰もが持っている自然な感覚ではなからうか。

理想郷というものもまた、時の流れと共に人の手によって、また心によって作られていくのではないかと思う。そして、より幸せに暮らせるよう人々は手を加えてゆくのだ。それは、ただ最初からあって暮らせるようになっているのではなく、一人一人の存在があって、一人一人の言動があるからこそ成り立っているものなのだと思う。そこに自然の存在も忘れてはならないだろう。ニュージーランドが第二の故郷になったのは、その場所を私自身が、そして自然を含め、私を取り巻いてくれた周りの皆と一緒に築き上げてきたからなのだと強く感じた。ニュージーランドは、ヨーロッパ人が入植することによって、人と自然のあり方が大きく変わった。私が感じる懐かしい風景は、街のたたずまいだったり、田舎の風景だったりするので、実はほとんどが入植者がつくり出した人と自然のあり方といえる。

大切なのは一人一人が自分たちの地域の人と自然を愛し、人間として手がとどく範囲の大きさの関わりを作り上げていくことなのだ。老子が述べたのはこのことだったのだ、と確信した。

人は自分たちが世界の中心だと錯覚しがちであるが、宇宙、地球、そして身の周りの自然の中で生かされていることを忘れてはならないと思う。目に見えないようで実は常に繋がりを持っている自然を、我々は大切にしなければならない。そのために参考になるのが、昔の人々の暮らしだろうことは、すでに多くの人々が唱えている。そして今、社会では、近代化のために捨ててきたものを取り戻そうという動きが見られる。

例えば、江戸時代が実は美しい時代だったという論証がいくつか出されている。江戸時代末期～明治時代に日本にやってきた欧米人が、その美しさを褒め称え、ユートピアのように語るものもある。そこには風景の美しさだけでなく、人の心のおおらかさや美しさも描かれているのだ。いくら昔の生活に戻りたくても、戻ることは不可能である。けれども、未来へ向けての新しい生活スタイルとして、我々が過去に置いて来てしまったものを取り戻すことはできるのだ。

そう、桃源郷は今ここに生きる一人一人が自分の手と心でつくるものなのだ。

D. 『達人 塾』の今後

今年度の『めざせ！徳地づくり達人 塾』は2005年2月26日(土) 第8回を最終回として一段落を終える。来年度の活動予定はまだ決まっていない。しかし、これまで活動してきて分かったことは、本気で取り組める人と支える人がいなければ、チャンスがいくらあっても活かされないということだった。今回のワークショップも、一つの出会いの機会として活かせるかどうかであり、ここでなされた交流が作った人脈が、大きな財産なのだということにも気が付いた。逆にワークショップが解散してなくなっても、リーダーとして皆を引っ張っていける人がいて、人と人との繋がりがしっかりしていれば、その活動は終わることなく発展していくことだろう。

これまで徳地町では、町民は行政に対し「これをやってほしい」と意見を言うだけのことが多く、その意見について実際自分で行動しようとする方は少なかったらしい。また、身近の細かな部分はよく見えても、地域全体をよりよくするという動きはあまり見られなかったようだ。『達人 塾』において、積極的に自らが行動していく姿勢、そして一部のみではなく徳地全体をも見渡せる視野を養っていくことも、住民の方々への期待のひとつであった。

しかし、第6回までやってきてやはり感じてしまったのが、「やってほしい」という、どこか人任せな部分であった。グループワークをするにあたって、サポーターがリーダー的役割を果たすことが少なくなかったと思う。これまで半年かけて作り上げてきた案も、いざ実現していくにあたって、いくつかの班では責任者がなかなか決まらない状況があった。

前節で述べたように、桃源郷は一人一人の手と心によってつくられていくものだと感じている今、自分のいる場所で自分に出来ることを精一杯やるのが大切なのだと実感している。「徳地づくり」も桃源郷づくりと同じであろう。一人一人が、自分たちでつくるしか

ないのである。

だからこそ、『達人 塾』にはこれからも続いていって欲しいと私は思う。ある活動について積極的な方が出てこないということは、その活動がまだ本当に必要なことではないのかもしれない。しかしそれはそれで、本当は何がしたいのか、何が必要なのかを、さらに深めを絞って考えていけばよいのではなかろうか。その中から積極性が生まれてくることを願って。

『達人 塾』がここまでに至る過程で、盛んな交流が行われてきたのだから、今後、今年度の繋がりが、より豊かで強いものへと変わってくれることを私は強く願っている。きっと参加者の方々もそれを望み期待されているのではないかと思う。

例えば今回参加された佐波高校の教頭先生が、前回お会いした時、このような嬉しいことをおっしゃってくださった。「来年参加したいという生徒がたくさんいる、今後『達人 塾』を佐波高の一つのクラブ活動として立ち上げたい。」と。

そこで一つ提案がある。佐波高校の生徒たちにサポーターズになってもらってはどうかと思うのである。7月からの活動を通じて、高校生にもサポーターズの役割を務めることができるだろうという手ごたえを感じている。今後『めざせ！徳地づくり達人 塾』が続く場合、サポーターズが少な過ぎるという問題も挙がっている。勿論、今後県立大学の学生や一般の方、また今年度の参加者の方々等呼び掛けてみるつもりだが、高校生にも是非参加していただきたい。佐波高生に参加してもらうことで県立大学と佐波高校という、学校間の交流と連携協力も盛んになって欲しいと思うと共に、いろんな立場のサポーターズがいた方が面白いと思う。いろんな人がいて、皆で地域をつくりあげていく、きっと将来その中で、徳地が一人一人の参加者にとって桃源郷と呼べる場所に近づいていくに違いない。

私も今後、出来る限り徳地との関わりを続けていきたいと思っている。そこが私にとっての桃源郷と言える日がいつか来ると信じて。

E. 桃源郷への出発

私が漠然と思い浮かべていた桃源郷、山口のどこかに、その名に相応しい場所があるだろうと思い描いていた桃源郷、それは探して見つかるものではなく、今ここに生きる一人一人が自分の手と心でつくるものなのだということが分かった。また、それは1人で出来ることではなく、人々との、そして自然との繋がりの中で生まれるものであることに気付いた。

そして、これから何をどうするべきかを考えたとき、その土地に合った、自然と共存出来る形の生活を目指したいと思った。例えば昔から受け継がれている知恵は先祖の汗と血の結晶であり、人間と自然との共存には欠かせない。時代が移り風土が変化するに連れ、それらの知恵には通用しなくなるものもあるだろうが、その流れは知っておくべきだろう。

また私は、全てをとは言わないが、自分の食べ物を自分でつくってみようと思う。もし

可能であれば、昔祖母が耕していた田畑を蘇らせ、祖母のいたあの光景を蘇らせたいと今密かに企んでいる。

田を耕し、里山から種々の生活の糧を得ていた伝統を、自然の中でのライフスタイルを忘れてはならない、日本人として日本の気候と風土に合った日本の生活を、山口人として山口の生活を、そこに住んでいる限り少しずつ学んで行こうと思う。無理をせず、自分のペースでゆっくりと。

- 一、一日一日をていねいに、心をこめて生きること
- 二、お互いの人間存在をみとめ合って（できればいたわりと愛情をもって）
生きること
- 三、それと、自然との接触を怠らぬこと

結局のところ人の世の詩も幸せもこの他になく、それ以外はすべて空しいことにすぎないのではないかな。

これは、医師であった細川宏氏が、ガンでなくなる二十八日前に書き残されたものです。これは細川氏だけでなく、多くの宗教家や修行者や思索家や苦しみを生き抜いた人々が到達する共通の結論です。

以上は、永年原因不明の病気に悩まされてきた生命学者、柳澤桂子さん著作（1999）からの引用である。今の私、これからの私、そして近代社会の中で生活する人々にとって、大切な言葉のような気がする。私はこの三つのことばの第二番目こそは、人間的な接触・交流の大切さを指し示しているのだと思う。

謝辞

引用文献

- ・ 澤田昭夫、1976『ユートピア 歴史・文学・社会思想 ルネッサンス思想4』荒竹出版株式会社
- ・ 松居直、2002『桃源郷ものがたり』福音館書店
- ・ 柳澤桂子、1999『放射能はなぜこわい 生命科学の視点から』地湧社

Web ページ

- ・ 「桃花源 ~ 古典的劉徳世界」

<http://village.infoweb.ne.jp/~andvlau/vutopia.htm>

(2004年5月27日)

- ・ 「陶淵明<桃花源記>小考 従来の理解とその問題点について 」

<http://www.tac-net.ne.jp/~kadowaki/lao-hu/gaikei/thyj/tao%20hua%20yuan%20ji%201.htm>

(2 0 0 4 年 1 2 月 7 日)

- ・ 「[研究ノート] フンザの春 小国寡民の研究」

<http://www.gakusen.ac.jp/faculty/mikio/hunza0529.doc>